

2012 アンコール遺跡群（2）

第2話 ... 「アンコールトムの観光」

いよいよ、アンコール遺跡群の観光が始まる今朝は、ホテルのロビーで am 8:00



に待つようにと、現地ガイドから指示を受けている。今回、初めて訪れた、シェムリアップの遺跡群の観光は、まず「アンコールトム」から始まると聞いている。

予定の時刻に、優しい笑顔の現地ガイド「アンさん」が迎えに来た。その車に乗り込むと、私たち夫婦の他に、日本人の3ペアがご一緒となって、ちょうどいい人数のツアーとなった。

車窓から、アンコールワットを横に観ながら通り過ぎて行く。そしてさらに暫く走ると、目の前に、入り口の幅の狭い門が現れた... 「アンコールワット」から「アンコールトム」へと続く道路上に、王さまと神々の都市「アンコールトム」の入口の一つ「南大門」である

この門の四面には、顔の長さだけでも3mを越えると言われている観世音菩薩の四



面仏が彫刻されている。そして、この「南大門」の前の道の両側には、神々と阿修羅が「ナーガ」という蛇神の胴体を引き合う大きな像が列んでいる。



これから観光をする遺跡群には、数々の架空の動物が登場するそうだが、アンコール遺跡群の観光に際して、ちょっと知っておきたいことがある。その一つが、この「ナーガ」である。ナーガとは、インド神話に起源を持つ「蛇の精霊あるいは蛇神」のことである。

「ナーガ」は、人間の世界と天上界をつなぐ「虹のかけ橋」とも考えられている。



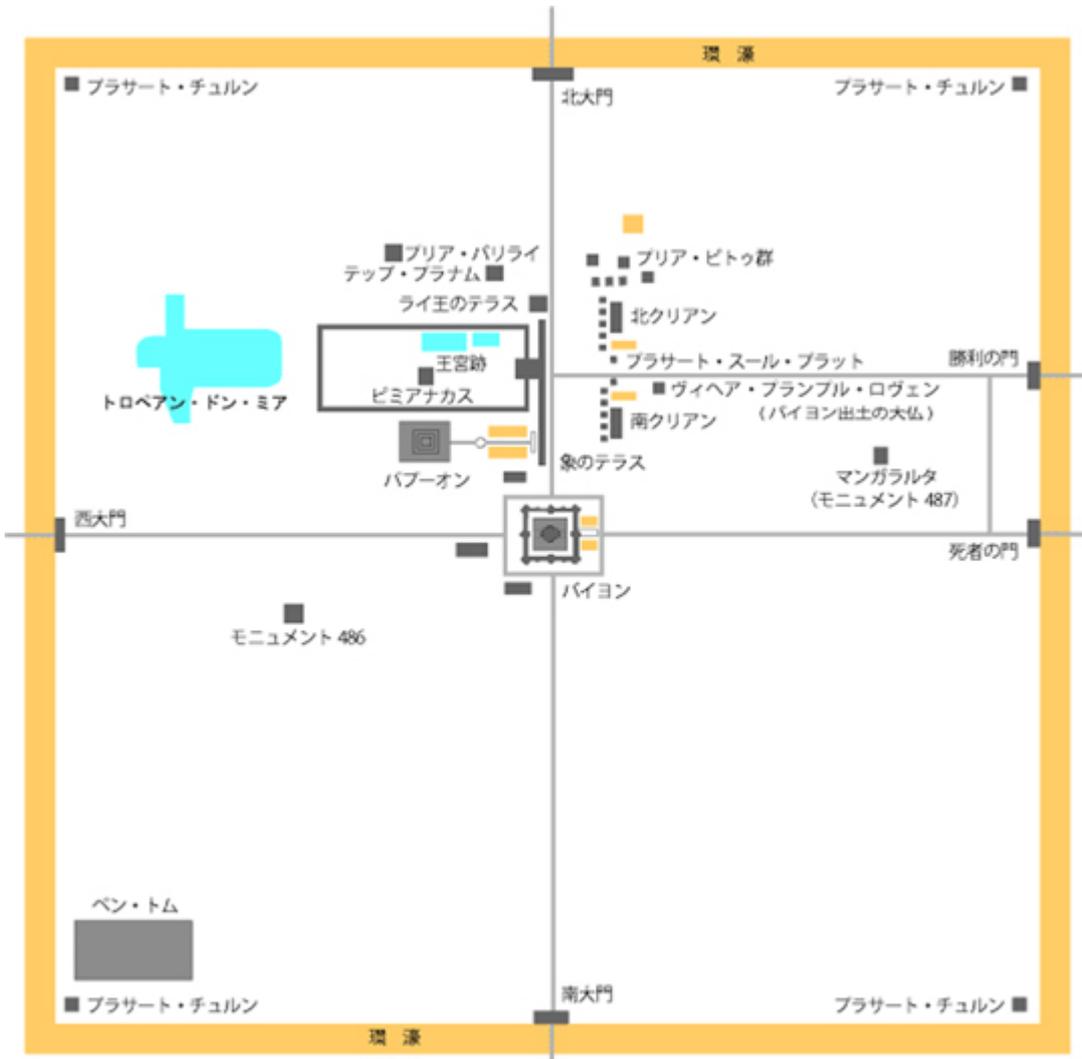
□ここ「アンコール・トム」の「南大門」の前にある環濠(おほり)に架かる橋の欄干には、この「ナーガ」が摸してある。これこそがまさに「虹のかけ橋」となっているのである。



□この「ナーガ」を引っ張る阿修羅と神々の像の列が「虹のかけ橋」の欄干を形作っているのは、「乳海攪拌」という「天地創造の神話」に基づいて造られています。(この神話は、また別の機会に書くことにします)

□この「南大門」をくぐり入る「アンコール・トム」とは、「大きな町」という意味だそうです□ この町は、一辺が3kmの堀と、ラテライトと呼ばれる「熱帯特有の赤茶色をした酸化物に富んだ石材」で作られた8mの高さの城壁で囲まれています。

周囲約12kmの城壁内には、十字に主要道路が配置され、その中央に「バイヨン寺院」があります。



南大門を
 潜って車で少し走ると、アンコールトムの中心 **バイヨン寺院**が見えてくる。
 □ここ「**アンコールトム**」と「**アンコールワット**」は、**アンコールの二大遺跡**とも言

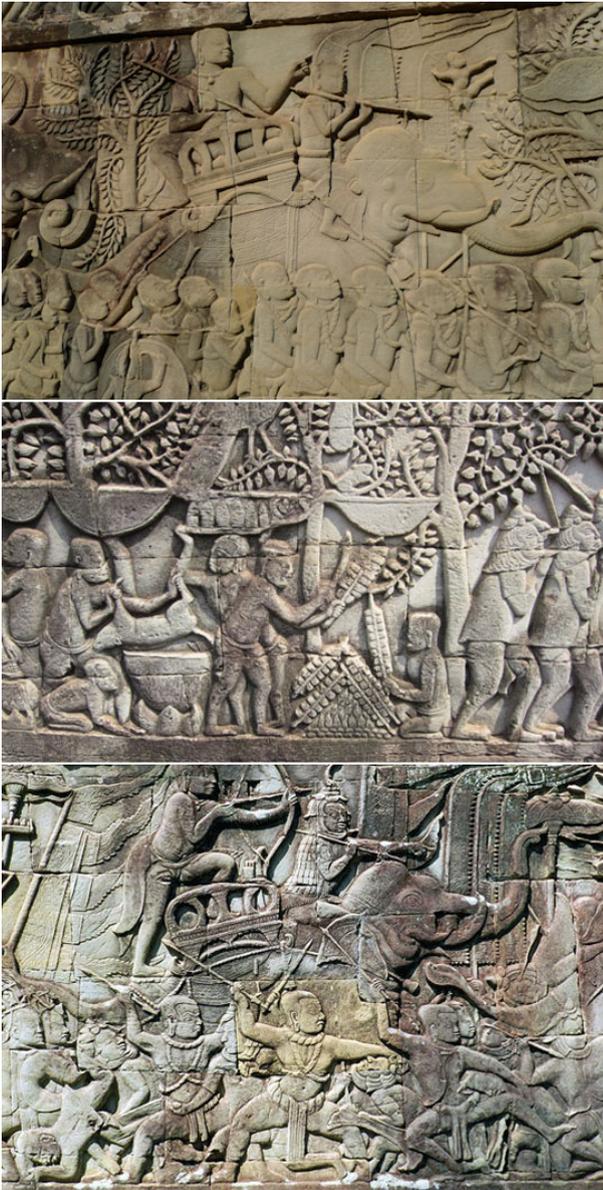


われています□

これから見学に足を踏み入れる **バイヨン寺院**の構造は、三層にわかれていて、高さ43mにも及ぶ**中央祠堂**を中心に **二重の回廊**が配置されている□



なかでも**圧巻**は、数え切れないほどの**人面像**と、先ほど観てきた南大門の前の、お堀に架かる橋の両側に並んでいる□**神々と阿修羅がナーガの胴体を引き合う54体の像**□は、



観る人たちを圧倒する迫力があります。

□クメール語の発音では **パヨン** の方が近いそうで、**パ**は「美しい」という意味だそうで、**ヨン**は「塔」の意味を持つそうです□

□第一回廊にはレリーフも残り、**水上戦**などが描かれ、水中に落ちた兵士がワニに食べられるシーンなどリアルな壁画が描かれています。

また、**ハスの葉の上で踊るユーモラスなアプサラ**なども描かれていて、ほのぼのとした雰囲気も垣間見えます。

□**アンコールワットのレリーフ**は、戦争の様子を描いたものがほとんどだそうだが、こちらのレリーフには、**日常生活を彫ったものが多い**と聞いている□

□これらの壁面には、12世紀の人々の生活模様が多数描かれている。漁 狩り・炊事など ... 人物や動物の表情は生きいきと輝き、石の表面からは、体温や匂いまでもが伝わってくるようです□

こうした第一回廊のレリーフを見てから、**バイヨン寺院** の内部の塔へと登って行



く。

第二回

廊は、約160メートル × 120メートルだそうだ。正面は、東側を向いている。



□現在残るレリーフは、他のアンコール遺跡とは大きく異なった特徴を持っていると言われていて、第二回廊には**戦争の様子や、バイヨン建設当時の市場の様子や狩の様子などが、レリーフに彫り込まれており、庶民の暮らしをうかがい知ることのできる貴重な資料**ともなっているそうです□

□第二層には16の塔があり、どの塔にも前述の観音菩薩と思われる四面像が彫られている。第二層の回廊には**ヒンドゥー教色の強いレリーフがデザインされていた。**

□第三層はテラスとなっており、やはりどの塔にも観音菩薩とおぼしき四面像が彫られている。第三層の中央には、**仏教の像が置かれていました。**



□ **バイヨン寺院**

でもっとも有名なのが、「クメールの微笑みとも呼ばれている」中央祠堂を始めとする、塔の4面に彫られている人面像である。見る人によってその表情はいろいろだが、一般に言われているのが、菩薩像を模しているといわれる□

それぞれの顔が微妙に違って、何時まで見ても飽きないものでしたよ。



回廊を降りて、次に「**パプーオン**」に向かった□

バイヨンの



□アンコール・

トムの中心にあるバイヨン寺院の、少し北西に**パプーオン寺院**がある□



□隠し子□とい

う伝説を持つこの **パプーオン寺院** は、3層からなるピラミッド型寺院で□今は中央部が崩れているが、かつては約50メートルの高さで、**バイヨン寺院**より高かったといわれている□□**当時のカンボジアの王が、自分の息子を殺されないようにと、この寺院に隠したこと**から「隠し子」と呼ばれるようになったそうだ□



□東塔門を入る

と、円柱で支えられた長さ200mにも及ぶ、まっすぐに伸びた□空中参道」が続いていた。この参道もまた、地上と天上とをつなぐ□虹の架け橋」なのである□

この後、王宮の中に創建された「ピミアナカス寺院」を眺める□



□王宮の中心部

にあり、赤く輝くように、小さなピラミッド型の建物が見えている。

このピミアナカス寺院は、ラテライトで3層に積み上げられていて、その上に中央祠堂が載せられているというものである□

このピミアナカスには、伝説が残されているので記しておこう。

□この中央塔の中には、ナーギー神という蛇の精が宿っていて、蛇は毎晩、美しい女性に姿を変えて王の前に現れ、王は妻と寝る前に、まずこの蛇の化身と交わらねばならなかった。もし、一夜でも、この行為を怠ったら、王は早死にすると信じられていた。なので、王様のみが、夜な夜な通う場所であったという伝説なのです□

こうした遺跡の観光をして、次に「王のテラス」へと向かった。



□王族たちが、

閲兵を行った「**アンコールトム**」の中の王宮前のテラスである□

このテラスの真正面には、勝利の門から続く道がのびている。 **王のテラスの北側に、ハスの花の彫刻があるテラスは、見応えがある。これには、3つの頭をもつゾウが、ハスの花をからめ採っている様子が彫刻されている**□



テラスの上

の**ライ王像**はレプリカで、本物はプノンペンの国立博物館にあるそうだ□



この**ライ王**

のテラスの高さは、約6mもあるそうで、ラテライトと砂岩で造られている。

ここは、現在のテラスが完成する前に、**12世紀末以前に、すでにテラスの原型があった**。そのもともとの壁面が観られるようにと、壁と壁の間に通路を設けて修復されている。そのもともとの壁面に観られる彫刻には、神々と阿修羅と一緒に描かれている。そして、女神像は、表情もさまざま、また、9つの頭をもつナーガのレリーフが見事に残っている□





これらのテラ

スの観光を終えて、バスに乗って市内のあるホテルへと向った。



昼食の会場

となったのは「リーホテル」のレストランで、クメール料理を戴いた。

□料理はさることながら、暑い中での観光が続いた後なので、涼しいレストランで飲んだ地ビールが何ともたまらなく美味しかったです□

□昼食後、宿泊しているホテルに帰って、お昼の休憩がおよそ2時間でした□

そして午後からの観光は、あの「アンコールワット」となります。

□□これまで見て下さって、ありがとうございました!!

□□続きはまた次回に ...